校長メッセージ　～合言葉は「子どもに軸足！」～

東長良中学校　丹羽

いじめる子への指導

1．いじめる原因や背景を探り、まずそこに心を寄せていく

いじめがよくないことは、誰でも知識としては知っています。だからこそ教師に見えないようにやります。しかしひとたびそれが発覚した時には、加害の子どもによっては大きな動揺をみせ、自分ではどうしてよいかわからない不安定な状況になりパニックになることもあります。また、世間では到底認められないような理屈をならべ、開き直りに徹する加害者もいます。いずれにしても、これから先自分の身に起こるであろう数々の変化に恐怖をいだいているリアクションと考えてよいでしょう。それには教師はつとめて冷静に対処したいものです。そんな中、いじめがはっきりした時に教師は、彼のその行為だけを見て指導するのではなく、いじめの原因やその背景を全力で探り、いじめの全体構造をまず明らかにしたい。そうでなければ、指導が的外れになり、効果的な指導はできないからです。行為を叱ることは誰でもできますが、それだけではいじめの解決、彼の変容にはつながりません。教師が安易に正論を振りかざし、いくら威圧的に指導しても、彼の心に響かなければ意味がありません。早く教師の説教が終わってほしいがために、彼は神妙に話を聞いたフリをしますが、決して心は変わりません。教師の自己満足だけが残るのです。いじめる子は、同調者であっても決まって現実に対する何らかの不平不満をかかえ、ストレスを募らせています。そのストレスや彼の行動特性がどこからきているのかを探り、まずそこに心を寄せ、保護者の協力を得ながら一緒に改善を図るよう努力することが教師の仕事です。また普通は、いじめをしてしまった、それによって相手を深く傷つけてしまったという自責の念や後悔の気持ちを指導のどこかの段階でいつかもつはずです。教師はあせらず彼が自らの力で気付くまであきらめず指導を続け、それを正面から受け止め、しっかりと応えていかなければなりません。その厳しい営みがなければ彼の心は変わることはないのです。

2．いじめ指導のポイントは「謝罪」の仕方と子ども特有の心理の理解にある

加害者の、心からではない早期の謝罪や誰でも言えるような安易な決意表明は、問題解決に向けてはむしろ害になります。加害者には、「なぜいじめのような卑劣な行為を行ったのか」、「自分の中のどんな心がそうさせたのか」、「なぜ未然に防げなかったのか」、「いじめている最中は、被害者のことをどう考えていたのか」等を十分考えさせ、表面的ではない“本当の心の奥”をえぐり出させなければなりません。ここが最も肝心な指導です。自分が早く楽になりたい、問題を終わらせたいからではなく、行為を心から悔い、相手のためにどうしても謝りたい気持ちにさせる、それこそが教師の専門職として役割です。そのためには、教師の我慢と粘り強さ、そしてある程度の時間はどうしても必要です。ところで、いじめの指導にあたっては、人間のあるべき理想的な姿や基準を持ち出して指導するだけでなく、子ども特有の心理（人より目立ちたい、集団の一番下には絶対になりたくない、みんなの前で恥はかきたくない等）や、子どもの社会を支配している“オキテ”（チクルことは最悪の行為、ボスの指示や考えは絶対、集団内の暗黙の序列は乱せない、友だちのいないことは何よりの恥等）をわかった上で指導をしなければ、教師の言葉が心に響くことはありません。教師が、子どものその切ない気持ちやジレンマをわかった上で指導をしているのか、単なる建前で指導しているかは、子どもには必ず伝わっていきます。

3．どうすべきかを自分で考え決定し責任をとる態度の形成を目指していく

加害者も個人により、彼を取り巻く状況が異なります。状況をよく把握し、彼に即したきめ細かな指導が必要です。その際に共通して大事なことは、教師が単に指示・命令をするのではなく、自己や自己をとりまく状況を少しでも改善していくためにどうすればよいかを自分で考え、最終的に彼自身が判断、決定し、責任をとる、そして教師がそれを支援し続けることです。いくらよいことだと言っても他からの命令や教師の指示によってやらされているうちは、行為の結果について彼は自分で責任をとることはせず、彼の成長はみられません。その営みがなければ、彼の中にとても大切な、自分の心に自分でブレーキをかける「自律の心」は育たず、同じいじめはしないにしても、また同じようなことをくり返していきます。